

令和7年12月総評

西躰 かずよし

ビルの整列の隙間に月がいて、
雪の前の日というしあわせ

うたた 岡山県

隙間の月や、雪の前の日にあるものは何だろう。ときおり呼ばれる名前のように、小休止のような時間がすぎる。それを「しあわせ」と言うとき、いつもより世界はやさしくなる。

明け空は未読だろうか手をかざす

桜庭 紀子 和歌山県

語り手の行為に願いが託される。「明け空は未読だろうか」という、はじまりに対する問い。既読の可能性を持つままに夜は明けて、そこには手をかざすという行為だけがのこる。

生きてゆく事とは好きを増やす事
こんなにきれいだったかな、雪

金光 舞 埼玉県

自身に言い聞かせるような一節。それは、語り手の願望を運ぶものかもしれない。生きていくことが好きを増やす過程であったなら、生は、どれほどきれいなままでいられただろう。雪を見る。ありのままの生の美しさに気づくことができるよう。

ベルベットの紫と
白く舞うレース
スポットライトを浴びて
小さなビオラになる

瑚彩 宮城県

ひかりをまとうベルベットの紫や、レースたち。それらが小さなビオラになれば、すべてが美しい音楽でつつまれるかもしれないと思う。スポットライトが色やかたちをふちどる。これまでよりも小さな声で。これまでよりも遠くの声で。

シーツから獣のにおい
母親はわたしと
縁を切りたいという

小川 未夜子 石川県

シーツからの獣のにおいが、そのことばを証明する。「縁を切りたい」という一節が、母とわたしの生を追いつめる。憎まれることで明らかになるもの。そして、すべてのことばを解き放ったとしても、けっして裏切られることのない憎悪。

つるひとつ
なくして鳥になるメガネ

まちのあき 宮城県

なくしたから飛べたのだろうか。語り手の声へと耳をすます。きっとそれは気のせいなんかではないだろう。「つるひとつ」のあとの行替えは、鳥になるまでの時間を表す。つるのないメガネが、鳥へとすがたを変える。

右手にふれて つめたい左手

上原一樹 群馬県

左手は左手であることがわからないから右手にふれる。僕たちは決して自身で自身を証明することはできない。目覚めたら、何かが見つかるのかもしれないと思いながら気づく、左手のつめたさ。

こころって何ですか

ちゃんちゃんこ着る

小西電波 北海道

こころに意味なんてないと思う。それでも語り手がこころを問うのは、せめてそこに、きちんとした理由があって欲しいからかもしれない。無造作に置かれた「ちゃんちゃんこ着る」という一節。それは、こころのぬくもりを探す旅のようにも見える。

思い出のはないちもんめ

今は有料駐輪場

佐々木 希 大阪府

とりとめもない語り手の景色が、有料駐車場に入れ替わる。利益を生み出すための新陳代謝。たった一文で表現される、かつてあったものがなくなるという日常の一幕。そしてゆっくりと摩耗していく懐かしさのようなもの。

背を撫でる手を羽として

歩き出す二人をホームから見る私

藤枝 優太 神奈川県

背を撫でる手が羽になる。追われるもののように歩き出す二人。見送るにはあまりにも遠い。ホームから見送るだけの私と、羽をもつ二人との対比の美しさ。